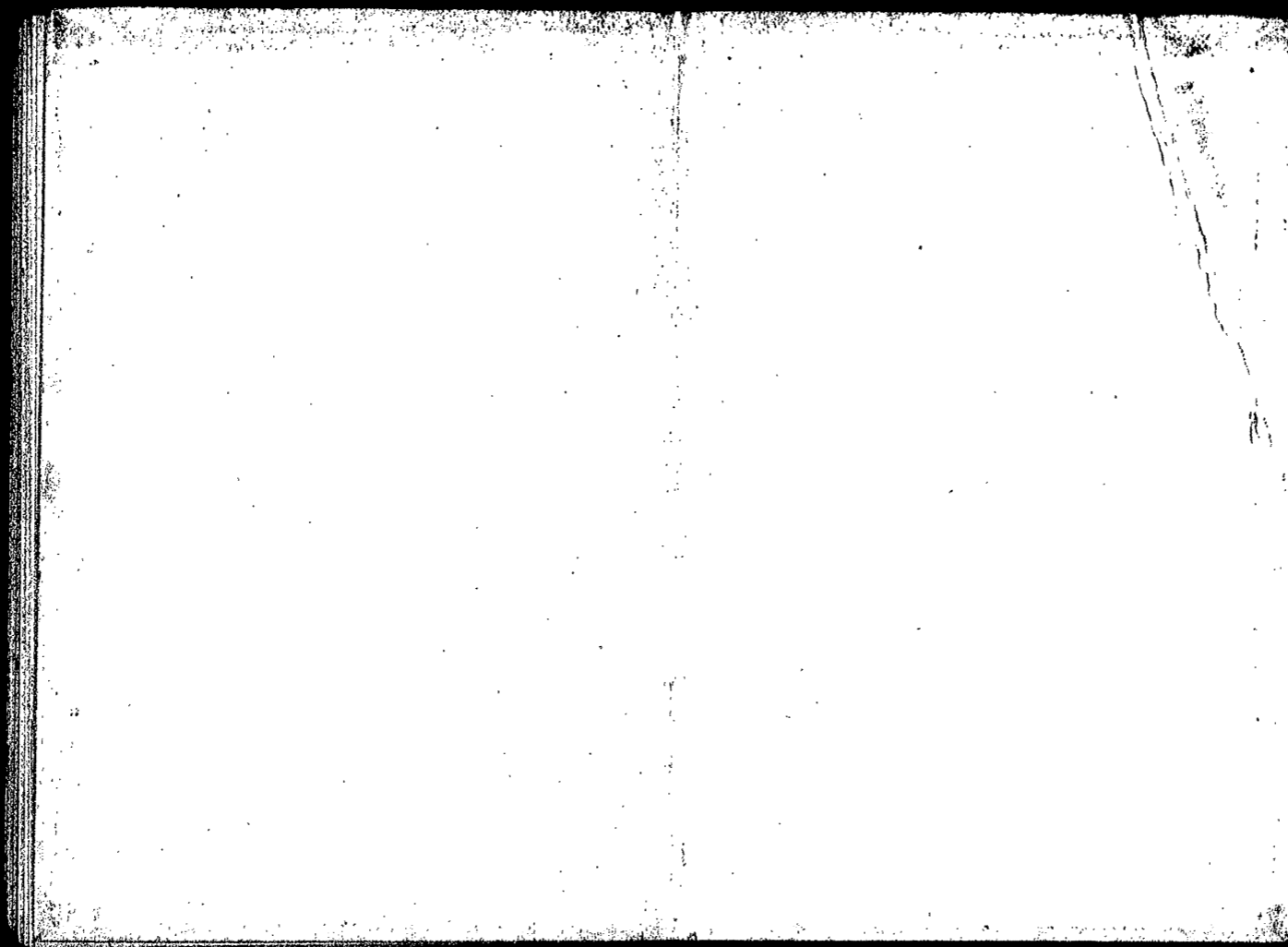




臺灣現勢要覽

昭和二年版

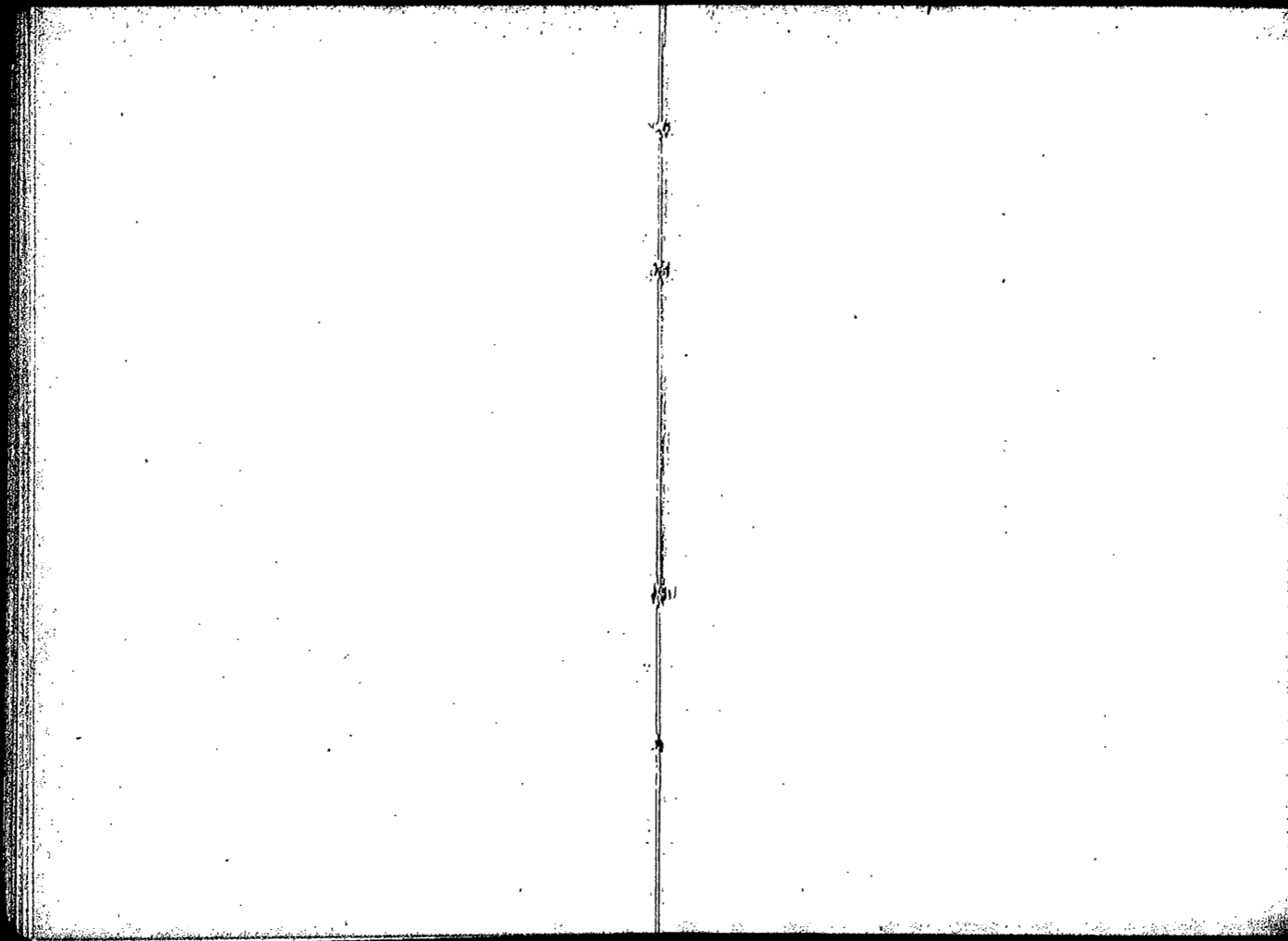
35
2



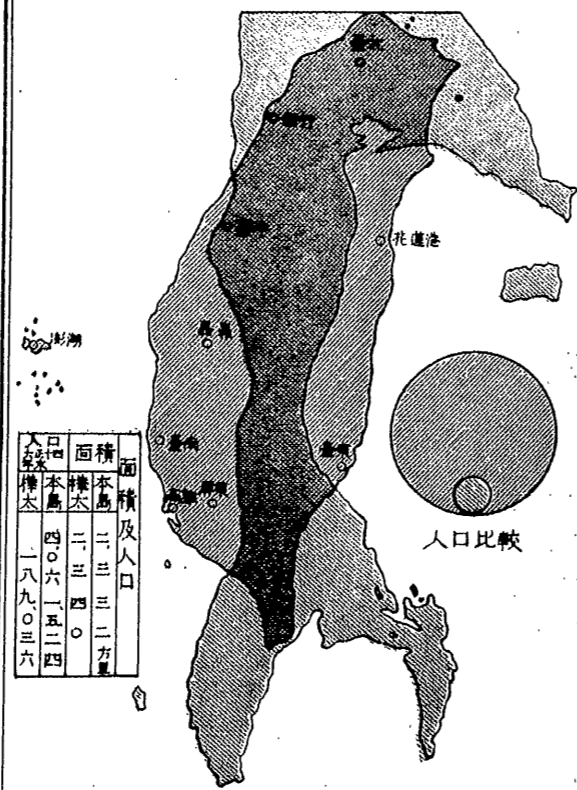
352
30233
16

臺灣現勢要覽

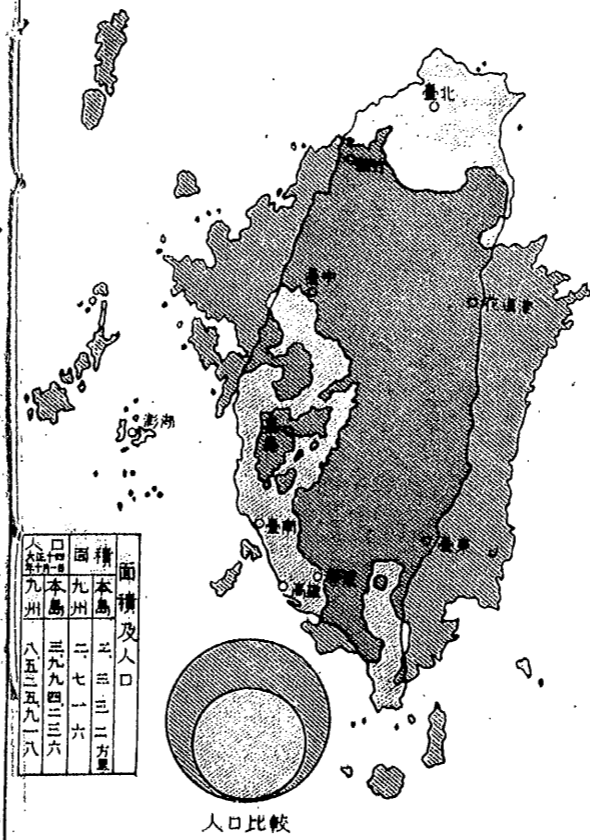
31



臺灣及樺太面積並人口比較

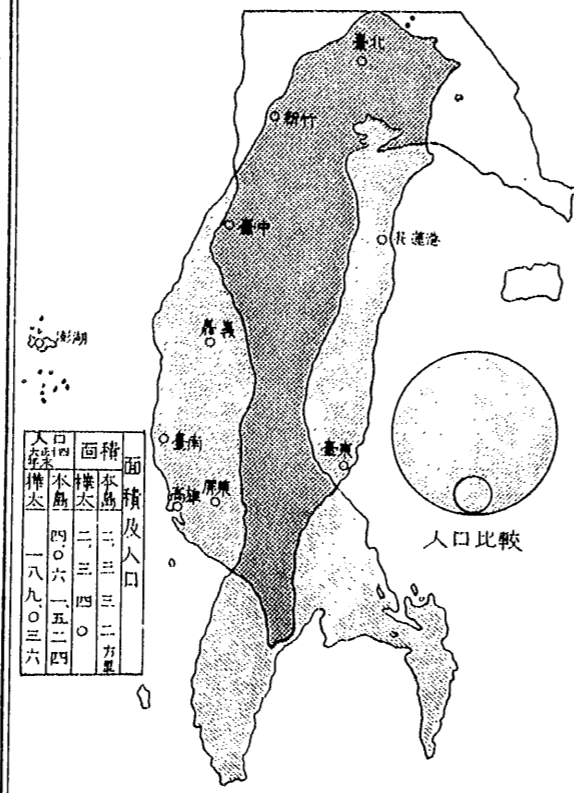


臺灣及九州面積並人口比較

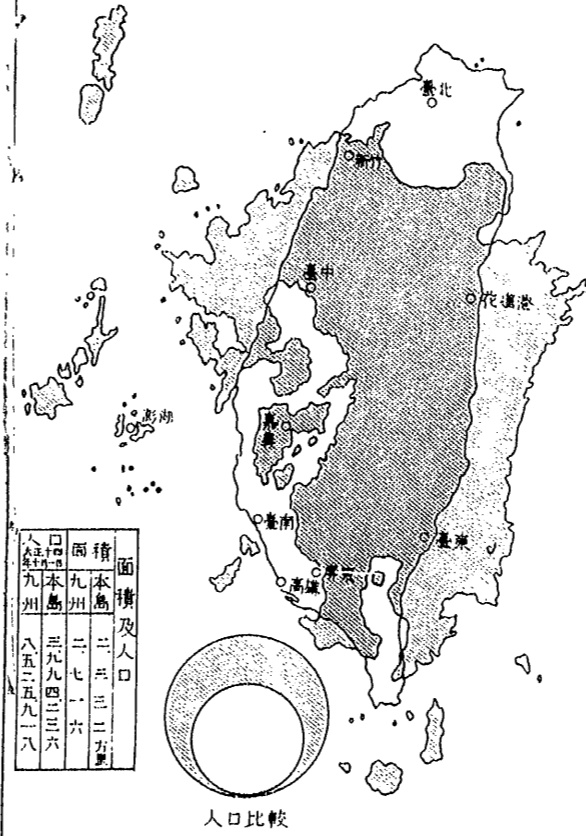


露光量違いにより重複撮影

臺灣及樺太面積並人口比較



臺灣及九州面積並人口比較



露光量違いにより重複撮影

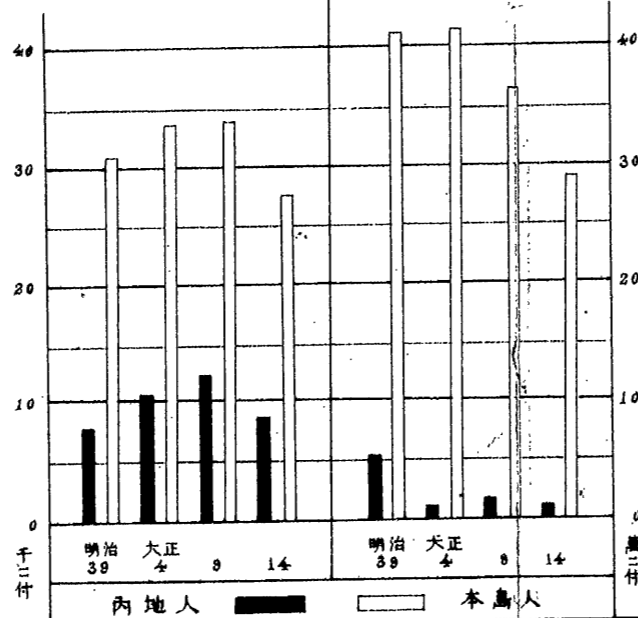
婚姻及離婚

大正十四年

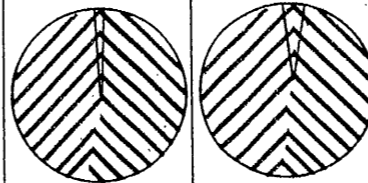
通婚者千ニ付婚姻
(内地人十六歳以上本島人十一歳以上)
(内線者 死別者 離婚者ヲ含ム)

有配者萬ニ付離婚
(内線者ヲ含マス)

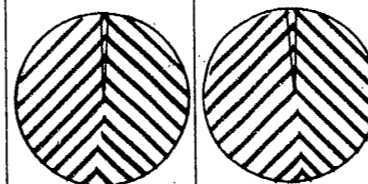
文 婦 男
離 婚
内地人 本島人



體性別通婚者千ニ付婚姻



體性別有配者萬ニ付離婚



凡例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、大正十四年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又大正十四年の事實不明のもの又は特に必要と認めたるものは、大正十四年以前の統計をも採りたり。
- 三 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 四 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に資せんか爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

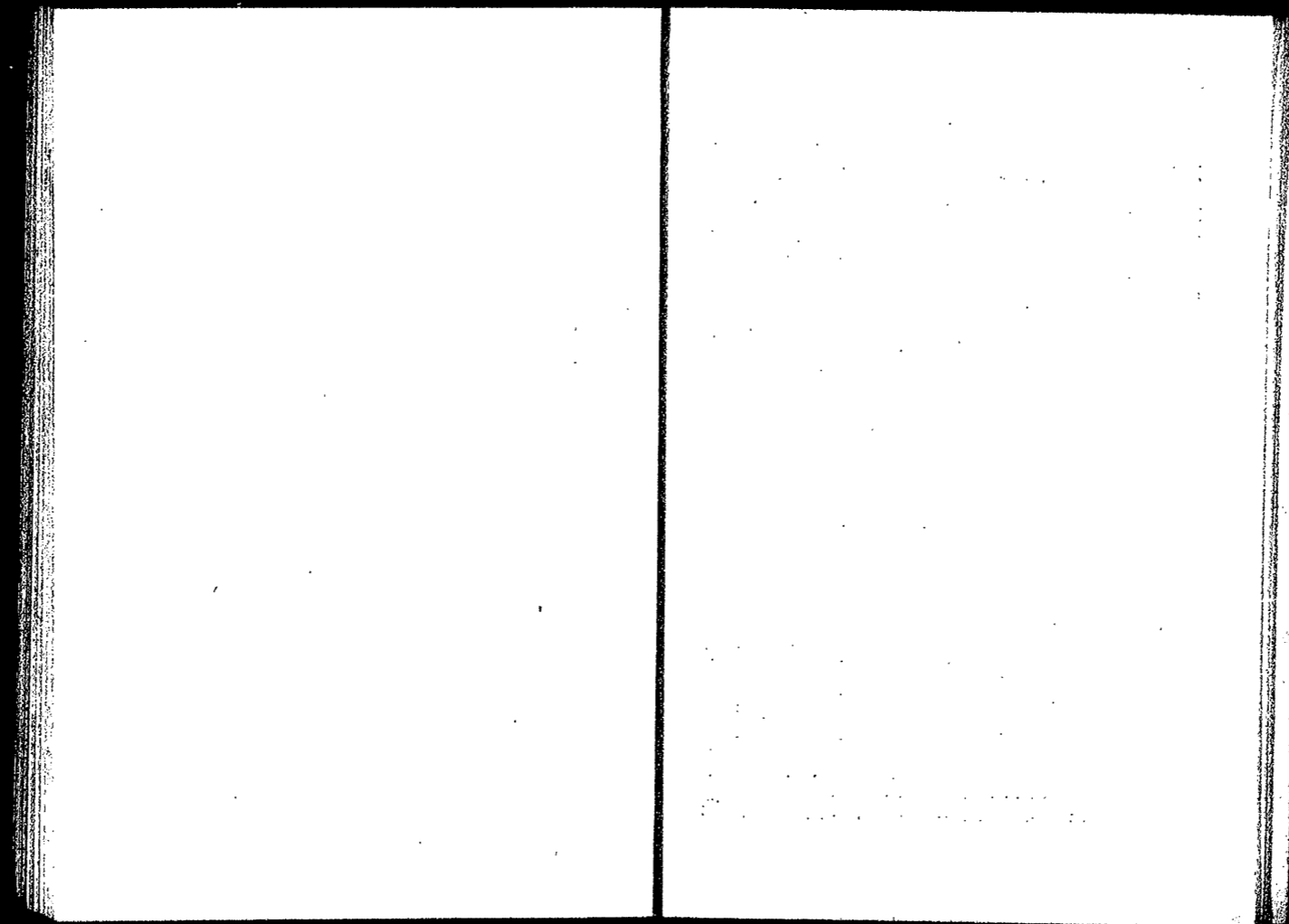
昭和二年五月

臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

一七六	出生率	一〇九	本籍別内地人	三二	山積
一七五	死亡率	一〇八	在外臺灣人	三一	河川
一七四	人口の増加	一〇七	在留外國人	三〇	毒地の利用
		一〇六	臺灣語を話す内地人	二九	氣温
		一〇五	國籍を離るる本島人	二八	雨量
		一〇四	婚姻、離婚、出生、死亡	二七	人口
		一〇三		二六	入
		一〇二		二五	本籍別内地人
		一〇一		二四	在留外國人
		一〇〇		二三	臺灣語を話す内地人
		九九		二二	國籍を離るる本島人
		九八		二一	婚姻、離婚、出生、死亡
		九七		二〇	
		九六		一九	
		九五		一八	
		九四		一七	
		九三		一六	
		九二		一五	
		九一		一四	
		九〇		一三	
		八九		一二	
		八八		一一	
		八七		一〇	
		八六		〇九	
		八五		〇八	
		八四		〇七	
		八三		〇六	
		八二		〇五	
		八一		〇四	
		八〇		〇三	
		七九		〇二	
		七八		〇一	
		七七			
		七六			
		七五			
		七四			
		七三			
		七二			
		七一			
		七〇			
		六九			
		六八			
		六七			
		六六			
		六五			
		六四			
		六三			
		六二			
		六一			
		六〇			
		五九			
		五八			
		五七			
		五六			
		五五			
		五四			
		五三			
		五二			
		五一			
		五〇			
		四九			
		四八			
		四七			
		四六			
		四五			
		四四			
		四三			
		四二			
		四一			
		四〇			
		三九			
		三八			
		三七			
		三六			
		三五			
		三四			
		三三			
		三二			
		三一			
		三〇			
		二九			
		二八			
		二七			
		二六			
		二五			
		二四			
		二三			
		二二			
		二一			
		二〇			
		一九			
		一八			
		一七			
		一六			
		一五			
		一四			
		一三			
		一二			
		一一			
		一〇			
		〇九			
		〇八			
		〇七			
		〇六			
		〇五			
		〇四			
		〇三			
		〇二			
		〇一			

昭和二年八月寄贈



臺灣現勢要覽

一 位置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に釋ぬるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百四十一哩にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はパシフィック海峽を隔て、近く比律賓群島に相隣す。

一 經度及緯度

澎湖島	經度(東經)	極東	臺北市棉花嶼東端	三三〇
	極西	臺南州北港郡口湖庄新港西端	三〇三	
	極南	高雄州恒春郡七草岩南端	三二〇	
	極北	臺北市基隆市彭佳嶼北端	三二六	
	極東	澎湖縣湖西庄查母嶼東端	一三〇	
	極西	臺安庄花嶼西端	一〇六	
	極南	臺安庄大嶼南端	一〇〇	
	極北	白沙庄斗嶼北端	一〇〇	

二面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬三千七百三十三方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二千六百七十八方里)とサルバドル(二千二百三十三方里)との中間に位す。

總數	面積	百分比
臺灣	2,332	100
朝鮮	2,333	100.1
樺太	2,333	100.1
北海道	2,333	100.1
内地府縣	2,333	100.1
内地府縣	2,333	100.1

本表の外租借地として關東州(州内、州外の面積二百四十一方里及南洋委任統治區域の面積百三十九方里あり。
朝鮮、樺太、關東州は同應統計書に依る。
北海道、内地府縣及南洋委任統治區域は帝國統計年鑑に依る。

三山嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總数は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帯、暖帯、温帯、寒帯等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數六十一座を算し、就中臺灣四十八座を占め、内地は僅かに十三座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北嶽は僅かに四十一位を占むるに過ぎず。

新高山	次高山	秀姑巒	マボラス山	南湖大山	富士山(内地)	中央尖山	關山
11000	10900	10800	10700	10600	10500	10400	10300
1	2	3	4	5	6	7	8

海面よりの高さ

順位

大水鹿山	菁萊主山	東郡大山	大霧山	大霧尖山	雲霧山	菁萊主山	東嶺大山	合歡山	北合歡山	東合歡山	南合歡山	桃山	畢山	丹山	白姑山	菁萊主山	南雙頭山
11000	10900	10800	10700	10600	10500	10400	10300	10200	10100	10000	9900	9800	9700	9600	9500	9400	9300
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18

能高山南峰	11:00	六
卑南主山	10:30	六
干卓漢山	10:30	三
カシバナ山	10:30	三
郡大	10:30	三
タロコ山	10:30	三
卓社大	10:30	三
小關	10:30	三
能高	10:30	三
大風	10:30	三
尖武	10:30	三
北トツノ山	10:30	三
北嶽(内地)	10:30	三
間嶽(内地)	10:30	三
鎗ヶ嶽(内地)	10:30	三
ハイトナ山	10:30	三
マビトサン山	10:30	三

白石山	10:30	六
ウワノ山	10:30	六
赤石山(内地)	10:30	六
奥高岳(内地)	10:30	六
東俣山(内地)	10:30	六
穂高岳(内地)	10:30	六
安東郡	10:30	六
積大	10:30	六
御嶽山(内地)	10:30	六
關門山	10:30	六
大石公山	10:30	六
白根山(内地)	10:30	六
小雪山	10:30	六
仙丈ヶ嶽(内地)	10:30	六
南嶽(内地)	10:30	六

内地の分は第四十四回風勢一班に依る。

四河川

臺灣は幅狭く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峰南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四十里
下淡水溪	三十七
曾文溪	三十七
大甲河	三十一
大湓溪	三十一
烏甲溪	二十六
八里坌溪	二十六
秀姑巒溪	三六
卑南溪	三五
大安溪	三五

本表は流域二十里以上のもののみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬七千町歩(三百七十萬八千甲)にして内、耕地七十八萬二千町歩(七十九萬九千甲)、林野二百五十九萬九千町歩(二百六十五萬七千甲)、其の他二十四萬六千町歩(二十五萬一千甲)なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の五割三分三厘にして、臺灣は二割一分六厘を以て之に墮き、樺太の五厘最も小なり。林野に於ては、樺太の九割一分五厘最も大にして、臺灣は七割一分六厘を以て第二位を占め、關東州の二割五分四厘最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは内地府縣の二割四分九厘にして、臺灣の六分八厘最も小なり。

實數	百分比例		
	耕地	林野	其他
臺灣	二一、六	七六、六	一、八
朝鮮	二一、八	七六、九	一、三
關東州	二一、八	七六、九	一、三
樺太	一、六	九三、七	零、一
關東	二一、八	七六、九	一、三
北海道	二一、八	七六、九	一、三
内地府縣	二一、八	七六、九	一、三
耕地は大正十四年末現在なり。			

林野の臺灣、樺太、關東州(州内、州外)は大正十四年末現在、朝鮮は大正十五年五月末現在、内地及北海道は大正十三年末現在なり。

朝鮮、樺太、關東州は同農林統計表に依る。

北海道、内地府縣の耕地は農林省統計表に依り、林野は帝國統計年鑑に依る。

六氣 温

臺灣は北回線に跨り、半は熱帯圏に位するか故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高気温は敢て内地より高しと謂ふにあらず。而も冬季は頗る暖かにして、高山ならざれば降雪なく、北部の平地に於ては偶々霜を見る事なしとせざるも極て稀なり。今内地其の他と比較するに、累年平均気温は我臺灣最も高きも、最高極度の気温に至りては内地其の他の部分却つて高し。即ち臺東の三十九度(華氏百二度二分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)より一分低く、又臺北の三十七度五分(華氏九十九度五分)は京城と同じくして大阪の三十七度六分(華氏九十九度七分)より一分低し。更に澎湖の三十三度五分(華氏九十二度三分)及恒春の三十四度九分(華氏九十四度八分)は大泊及函館を除けば他の何れの地方よりも低し。

地名	大正十四年平均		最高の極	最低の極
	攝氏	華氏		
澎湖	33.5	92.3	38.0	25.0
臺南	33.5	92.3	38.0	25.0
臺東	33.5	92.3	38.0	25.0
恒春	34.9	94.8	38.0	25.0
基隆	37.5	99.5	40.0	23.0
臺北	37.5	99.5	40.0	23.0
京城	37.5	99.5	40.0	23.0
天津	37.5	99.5	40.0	23.0
大津	37.5	99.5	40.0	23.0
關東	37.5	99.5	40.0	23.0
旅順	37.5	99.5	40.0	23.0
北平	37.5	99.5	40.0	23.0
中州	37.5	99.5	40.0	23.0
山東	37.5	99.5	40.0	23.0
蘇州	37.5	99.5	40.0	23.0
杭州	37.5	99.5	40.0	23.0
寧波	37.5	99.5	40.0	23.0
紹興	37.5	99.5	40.0	23.0
嘉興	37.5	99.5	40.0	23.0
湖州	37.5	99.5	40.0	23.0
溫州	37.5	99.5	40.0	23.0
福州	37.5	99.5	40.0	23.0
廈門	37.5	99.5	40.0	23.0
汕頭	37.5	99.5	40.0	23.0
海口	37.5	99.5	40.0	23.0
廣州	37.5	99.5	40.0	23.0
香港	37.5	99.5	40.0	23.0
澳門	37.5	99.5	40.0	23.0
北京	37.5	99.5	40.0	23.0
天津	37.5	99.5	40.0	23.0
大津	37.5	99.5	40.0	23.0
關東	37.5	99.5	40.0	23.0
旅順	37.5	99.5	40.0	23.0
北平	37.5	99.5	40.0	23.0
中州	37.5	99.5	40.0	23.0
山東	37.5	99.5	40.0	23.0
蘇州	37.5	99.5	40.0	23.0
杭州	37.5	99.5	40.0	23.0
寧波	37.5	99.5	40.0	23.0
湖州	37.5	99.5	40.0	23.0
溫州	37.5	99.5	40.0	23.0
福州	37.5	99.5	40.0	23.0
廈門	37.5	99.5	40.0	23.0
汕頭	37.5	99.5	40.0	23.0
海口	37.5	99.5	40.0	23.0
廣州	37.5	99.5	40.0	23.0
香港	37.5	99.5	40.0	23.0
澳門	37.5	99.5	40.0	23.0

地名	大正十四年平均		最高の極	最低の極
	攝氏	華氏		
澎湖	33.5	92.3	38.0	25.0
臺南	33.5	92.3	38.0	25.0
臺東	33.5	92.3	38.0	25.0
恒春	34.9	94.8	38.0	25.0
基隆	37.5	99.5	40.0	23.0
臺北	37.5	99.5	40.0	23.0
京城	37.5	99.5	40.0	23.0
天津	37.5	99.5	40.0	23.0
大津	37.5	99.5	40.0	23.0
關東	37.5	99.5	40.0	23.0
旅順	37.5	99.5	40.0	23.0
北平	37.5	99.5	40.0	23.0
中州	37.5	99.5	40.0	23.0
山東	37.5	99.5	40.0	23.0
蘇州	37.5	99.5	40.0	23.0
杭州	37.5	99.5	40.0	23.0
寧波	37.5	99.5	40.0	23.0
湖州	37.5	99.5	40.0	23.0
溫州	37.5	99.5	40.0	23.0
福州	37.5	99.5	40.0	23.0
廈門	37.5	99.5	40.0	23.0
汕頭	37.5	99.5	40.0	23.0
海口	37.5	99.5	40.0	23.0
廣州	37.5	99.5	40.0	23.0
香港	37.5	99.5	40.0	23.0
澳門	37.5	99.5	40.0	23.0
北京	37.5	99.5	40.0	23.0
天津	37.5	99.5	40.0	23.0
大津	37.5	99.5	40.0	23.0
關東	37.5	99.5	40.0	23.0
旅順	37.5	99.5	40.0	23.0
北平	37.5	99.5	40.0	23.0
中州	37.5	99.5	40.0	23.0
山東	37.5	99.5	40.0	23.0
蘇州	37.5	99.5	40.0	23.0
杭州	37.5	99.5	40.0	23.0
寧波	37.5	99.5	40.0	23.0
湖州	37.5	99.5	40.0	23.0
溫州	37.5	99.5	40.0	23.0
福州	37.5	99.5	40.0	23.0
廈門	37.5	99.5	40.0	23.0
汕頭	37.5	99.5	40.0	23.0
海口	37.5	99.5	40.0	23.0
廣州	37.5	99.5	40.0	23.0
香港	37.5	99.5	40.0	23.0
澳門	37.5	99.5	40.0	23.0

東	京	三六八	三九	三〇	三六	三九	一七九	(1) 三三	一三	七一
新	瀋	三三	三三	三六	三〇	三〇	三〇	(1) 九七	一五	二二
青	森	九	九	九	九	八	八	(1) 二〇	(1) 三	二二

(1)は零點下を示す。

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏季五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き暖暖街は一年五千耗を以て第一位を占め、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては潮州郡所在地クワルスの五千三百耗最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量九百六十耗なり。更に之を内地其他と比較するに、臺灣は全島を通じて一般に他の地方よりも降雨量多し。

臺	澎	臺	恒	東	南	湖	中	北	南
南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年	大正十四年
總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量	總雨量
二二七	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三

新野

澗

一
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

朝基 釜山 京城 樺城 關東 旅大 北滿 旭地 內那 東大 府地

隆 岐 鮮 山 城 津 泊 州 順 道 館 幌 川 縣 霸 崎 阪 京

二
三
四
五
六
七
八
九
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

八人口

臺灣の總人口は大正十四年末現在四百十四萬人にして中、内地人十八萬九千人、本島人三百八十三萬八千人、蕃人八萬六千人(蕃地居住)、外國人三萬三千人なり。
 大正十四年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、帝國の總人口は八千三百萬人を算し、臺灣は三百九十九萬人にして、實に其の四分八厘を占む(蕃地居住の蕃人を除く)。更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、蘇格蘭(四、八九三、〇三二)と瑞西(三、九三六、三三〇)との中間に在り。

一 種族別人口 (大正十四年末現在)

種族	總數	男	女	百分比
内地人	189,000	101,950	87,050	100.0
本島人	3,838,800	1,930,000	1,908,800	96.6
蕃人	86,600	43,000	43,600	3.5
外國人	33,000	17,000	16,000	0.3
總計	4,147,400	2,191,950	2,055,450	100.0

本島人中には平地の蕃社に居住する蕃人五萬七千六百六十八人を合算せり。故に本表の蕃人には蕃地の蕃社に居住する者のみを掲せり。

二 内地其の他との人口比較 (大正十四年十月一日現在)

種族	實數	百分比	一方里に付
總計	4,147,400	100.0	1,910
内地人	189,000	4.6	1,110
本島人	3,838,800	92.8	1,800
蕃人	86,600	2.1	400
外國人	33,000	0.8	160
内地府縣	3,388,800	81.8	1,540
北海道	2,467,900	59.5	1,100
北支那	338,900	8.2	1,600
朝鮮	392,000	9.5	1,700
滿洲	392,000	9.5	1,700
南洋羣島	392,000	9.5	1,700

本表の外租借地としての關東州(州内、州外)は人口一、〇五四、〇七四人を有し、一方里に付人口四、三七四人及南洋委任統治區域は人口五六、二九四人を有し、一方里に付人口四〇五人を算す。
 朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は帝國統計年鑑に依る。
 北海道、内地府縣は國勢調査報告に依る。

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千
人にして内、熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二
人を以て之に次ぎ、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、
山口の兩縣順次に之に次ぎ其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比	順位
熊本縣	一六、三、五三	一〇二	一
鹿兒島縣	一六、二、七二	九九	二
福岡縣	八、八、六六	五四	三
山口縣	八、八、〇一	五二	四
廣島縣	七、七、七三	四七	五
佐賀縣	六、六、〇〇	四一	六
東京府	六、五、七三	四〇	七
長崎縣	六、四、七三	三九	八
宮城縣	六、三、七三	三九	九
大阪府	六、三、七三	三九	一〇

三德茨京和靜島福香石沖岐高宮岡愛愛新兵
歌
重島城都山岡根島川川繩早知崎山媛知瀧庫

府縣	人口	百分比	順位
熊本縣	一六、三、五三	一〇二	一
鹿兒島縣	一六、二、七二	九九	二
福岡縣	八、八、六六	五四	三
山口縣	八、八、〇一	五二	四
廣島縣	七、七、七三	四七	五
佐賀縣	六、六、〇〇	四一	六
東京府	六、五、七三	四〇	七
長崎縣	六、四、七三	三九	八
宮城縣	六、三、七三	三九	九
大阪府	六、三、七三	三九	一〇

長 野 縣 千 代 神 山 鳥 宮 山 群 崎 北 岩 秋 霄
 野 井 葉 川 賀 形 取 山 梨 馬 玉 良 道 木 手 田 森
 奈 海

内地人總數十六萬四千二百六十六人中、内地に本籍を有せざる者二十六人、本籍不詳九人を除く。

長	野	縣	千	代	神	山	鳥	宮	山	群	崎	北	岩	秋	霄
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。

支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人に次ぐ。

總數	4,785
男	3,101
女	1,684
支那	4,236
爪哇	188
海峽植民地	105
其他	56

海峽植民地	105
新嘉坡	65
檳榔嶼	20
其他	20
福州	766
汕頭	236
廈門	385
其他	56
總數	4,785

一 在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり、今之が國籍を辨ぬるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次に並く。

總數	支那	英吉利	北米合衆國	西班牙	智利	英領印度	ベネジュラ	比律賓	獨逸	露西	瑞典	佛蘭西
三六六四	三、四六七	八九	四二									

葡 丁 希 加 伯 波 濱
 荷 威 威 威 威 威 威
 抹 威 威 威 威 威 威
 牙 威 威 威 威 威 威

本表の外、外國に國籍を有せざる者七百九十九人、國籍不詳三人あり。本表には調査當日基隆港泊の外國船乗組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

二二 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの数は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二・五分より、大正九年の百五十二分に減退したり。

年	總數		男女別内地人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	六八九	一〇〇	二九二	一〇八
大正四年	一六五〇	三二八	一三三	一〇五
同 九年	一七三〇	三三〇	一三三	一〇七

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

二三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの数は、明治三十八年の一萬二千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六百五十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八・六分を算するに過ぎず。

年	總數		男女別本島人千に付	
	男	女	男	女
明治三十八年	一、二七〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二七〇
大正四年	五、四三〇	四、九〇〇	四、八〇〇	六三〇
同 九年	九、八〇〇	八、八〇〇	八、七〇〇	一、一〇〇

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一四 婚姻、離婚、出生、死亡

臺灣に於ける最近十四年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一人三分より大正十四年には九人三分に減少し、離婚は同く一人五分より一人四分九分より四十一人一分に低下せり。死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き三十八人八分之多きに達したるも、大正十四年には二十四人一分に減退したり。従つて出生の死亡超過数は年により甚だしき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、大正十四年には六萬八千人に達したり。

大正元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年
婚姻	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
離婚	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
出生(生勢)	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
死亡	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
自衛隊員	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年
婚姻	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
離婚	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
出生(生勢)	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
死亡	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
自衛隊員	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十四年間に就て観るに、年に依りて増減ありと雖、大正十年には人口千に付四十三人二分を以て最高度を示す。次に之を内地人のみに就て観るに逐年増加の趨勢にありしか、大正七年以降は高低常ならず。又本島人の出生率は特に定型なし。更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は其の割合最も高くして、大正九年迄は北海道と稍々一致し、内地府縣は我臺灣に於ける内地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の三十九人七分(大正十三年)なるが故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一 出生率 (人口千に付生数)

年	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	29.9	29.6	29.5	2.8
二年	30.4	30.1	30.0	3.5
三年	31.1	30.8	30.7	4.2
四年	31.8	31.5	31.4	4.9
五年	32.5	32.2	32.1	5.6
六年	33.2	32.9	32.8	6.3
七年	33.9	33.6	33.5	7.0
八年	34.6	34.3	34.2	7.7
九年	35.3	35.0	34.9	8.4
十年	36.0	35.7	35.6	9.1
十一年	36.7	36.4	36.3	9.8
十二年	37.4	37.1	37.0	10.5
十三年	38.1	37.8	37.7	11.2
十四年	38.8	38.5	38.4	11.9
十五年	39.5	39.2	39.1	12.6
十六年	40.2	39.9	39.8	13.3
十七年	40.9	40.6	40.5	14.0
十八年	41.6	41.3	41.2	14.7
十九年	42.3	42.0	41.9	15.4
二十年	43.0	42.7	42.6	16.1

二 内地其の他との出生率累年比較 (人口千に付)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	29.9	29.6	29.5	29.5	29.5	29.9
二年	30.4	30.1	30.0	30.0	30.0	30.4
三年	31.1	30.8	30.7	30.7	30.7	31.1
四年	31.8	31.5	31.4	31.4	31.4	31.8
五年	32.5	32.2	32.1	32.1	32.1	32.5
六年	33.2	32.9	32.8	32.8	32.8	33.2
七年	33.9	33.6	33.5	33.5	33.5	33.9
八年	34.6	34.3	34.2	34.2	34.2	34.6
九年	35.3	35.0	34.9	34.9	34.9	35.3
十年	36.0	35.7	35.6	35.6	35.6	36.0
十一年	36.7	36.4	36.3	36.3	36.3	36.7
十二年	37.4	37.1	37.0	37.0	37.0	37.4
十三年	38.1	37.8	37.7	37.7	37.7	38.1
十四年	38.8	38.5	38.4	38.4	38.4	38.8
十五年	39.5	39.2	39.1	39.1	39.1	39.5
十六年	40.2	39.9	39.8	39.8	39.8	40.2
十七年	40.9	40.6	40.5	40.5	40.5	40.9
十八年	41.6	41.3	41.2	41.2	41.2	41.6
十九年	42.3	42.0	41.9	41.9	41.9	42.3
二十年	43.0	42.7	42.6	42.6	42.6	43.0

同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三六	三七	三八	三九	四〇	四一
三三	三三	三三	三三	三三	三三
三五	三五	三五	三五	三五	三五
三六	三六	三六	三六	三六	三六
三七	三七	三七	三七	三七	三七
三八	三八	三八	三八	三八	三八
三九	三九	三九	三九	三九	三九
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇
四一	四一	四一	四一	四一	四一

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同應統計書に依り算出す。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

一六 死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十四年間に就て觀るに、是れ亦高低常ならずと雖、大正十二年には著しく低下し、人口千に付二十一人六分を以て最低の記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、大正十四年には本島人二十四人八分なるに對し、内地人は僅かに十一人三分を示せり。
更に之を内地其の他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして、北海道之に次ぎ、朝鮮は内地府縣と稍々一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは、智利及洪牙利等にして大正十三年には智利二十九人二分、洪牙利二十人三分を示せり。

一 死亡率 (人口千に付)

大正元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
三六	三七	三八	三九	四〇	四一	四二
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五
三六	三六	三六	三六	三六	三六	三六
三七	三七	三七	三七	三七	三七	三七
三八	三八	三八	三八	三八	三八	三八
三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九
四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇	四〇
四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一

同十年 同十一年 同十二年 同十三年 同十四年
 朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同統計書に依り算出す。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	内地其他の死亡率累年比較 (人口千に付)							
								樺太	關東州	北海道	内地府縣	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか、大正元年末には三百三十五萬に増加し、更に大正十四年末には四百萬に達し、過去十四年間に二割一分の増加を示せり。更に人口増加の趨勢を内地其他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に次ぎ、北海道は第三位を占め、大正八年迄は臺灣と内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一 最近十四箇年間の人口 (各年末現在)

大正	元	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十	十	十	十	十
總數	3,500,000	3,600,000	3,700,000	3,800,000	3,900,000	4,000,000	4,100,000	4,200,000	4,300,000	4,400,000	4,500,000	4,600,000	4,700,000	4,800,000	4,900,000
男	1,750,000	1,800,000	1,850,000	1,900,000	1,950,000	2,000,000	2,050,000	2,100,000	2,150,000	2,200,000	2,250,000	2,300,000	2,350,000	2,400,000	2,450,000
女	1,750,000	1,800,000	1,850,000	1,900,000	1,950,000	2,000,000	2,050,000	2,100,000	2,150,000	2,200,000	2,250,000	2,300,000	2,350,000	2,400,000	2,450,000
指數	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
四 三 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年
本表には藩地の蕃社に居住する蕃人を除き、平地の蕃社に居住する蕃人は之を算入せり。

二 内地其他との累年人口指數 (各年末現在)

大正	元	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十	十	十	十	十
臺灣	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114
朝鮮	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114
樺太	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114
關東州	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114
北海道	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114
内地府縣	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114

同十年	三三	二六	二五	二五	二五	二五
同十一年	三三	二六	二五	二五	二五	二五
同十二年	三三	二六	二五	二五	二五	二五
同十三年	三三	二六	二五	二五	二五	二五
同十四年	三三	二六	二五	二五	二五	二五

朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同統計書に依る。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
内地府縣及北海道の大正九年以後は十月一日現在なり。

一八番 人

臺灣の華人は之をタイヤル、サイセツト、ブヌン、ツオウ、バイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。大正十四年末現在蕃社数は七百十六、戸數二萬二千九百三十九、人口十三萬六千人なるも、就中五萬七百六十八人は平地の蕃社に居住するが故に、實際蕃地に居住するもの、數は八萬五千九百三十八人なり。
各種族中人口最も多きはバイワン族にして、總人口の三割を占め、アミ族の二割八分、タイヤル族の二割三分等順次に耶く。

總數	一五七〇	六三三	六八五	一〇〇〇
タイヤル	三三六	一五九	一六六	三六
サイセツト	一三三	六五	七〇	〇元
ブヌン	一七八	九一	九七	〇元
ツオウ	二〇〇	一〇七	一一〇	一五
バイワン	一四四	七三	七一	三
アミ	一五〇	八〇	七〇	一三
ヤミ	一五〇	八〇	七〇	一三

本表中、平地の蕃社に居住する華人五萬七百六十八人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官制に根本的改正を加へ、従来の十二廳を五州二廳に改めたりしも、大正十五年七月一日復た澎湖廳を設置して三廳となし、現に五州は之を五市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十二庄を置き、三廳は之を九支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

澎湖廳	臺北廳	新竹廳	臺南廳	嘉義廳	高要廳	臺東廳	花蓮廳	澎湖廳
廳	廳	廳	廳	廳	廳	廳	廳	廳
二	九	二	八	二	七	一	一	一
支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳	支廳
一	三	一	一	一	一	一	一	一
市	市	市	市	市	市	市	市	市
五	五	五	五	五	五	五	五	五
街	街	街	街	街	街	街	街	街
三	三	三	三	三	三	三	三	三
庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄	庄
五	五	五	五	五	五	五	五	五
區	區	區	區	區	區	區	區	區
一	一	一	一	一	一	一	一	一

本表は昭和元年十二月末現在なり。

二〇 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは、燕中州の四百七十八方里餘にして、高雄、燕南、花連港、新竹、燕北、燕東の順序を以て之に置き、澎湖廳は僅かに八方里餘を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、燕中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、燕南州は愛媛、千葉の中間に、花連港廳、新竹州及燕北州は和歌山、京都の中間に、燕東廳は鳥取、佐賀の中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

一 州及廳の面積

州及廳	面積 (方里)	百分比
全	3,332.5	100.0
燕中州	478.0	14.3
燕南州	376.0	11.3
燕北州	376.0	11.3
燕東廳	376.0	11.3
高雄州	376.0	11.3
花連港廳	376.0	11.3
澎湖廳	8.0	0.2
新竹州	376.0	11.3

佐賀 順位は、一、道三府四十三縣及州、應の面積の順位を示す。

二 内地府縣との面積比較

鹿島	東京	新潟	花和	千歳	愛三	高山	宮塞	熊
東取	都北	竹	港山	進歌	葉南	媛宜	雄口	城中
鹿島	鹿島	府州	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島	鹿島
三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六	三〇六

二 州及廳の人口

五州二廳中、人口の最多なるは蕨南州の百四萬三千八にして、蕨中州は八十七萬九千人を以て之に次ぎ、以下蕨北、新竹、高雄、花蓮港、蕨東の順序を以てし、一方里の人口は蕨北州四千七百五人を以て最高度を示し、蕨東廳の六百六十六人最も低し。
 今之を内地府縣に比較すれば、蕨南州は宮城、秋田の中間に、蕨中、蕨北の兩州は岩手、青森の中間に、新竹、高雄の兩州は福井、沖繩の中間に位し、花蓮港及蕨東の兩廳は、人口餘りに少くして比較すべき類似の府縣なし。

一 州及廳の人口 (大正十四年末現在)

州及廳	實數	百分比	平均人口(一方里に付人口)	全面積
全	4,215,500	100.0	3,300	1,276
蕨北州	4,750	0.11	4,750	3,600
蕨中州	89,338	2.12	3,600	3,060
蕨南州	1,045,522	24.81	3,300	1,276
蕨東廳	6,666	0.16	6,666	1,276
新竹州	104,522	2.48	104,522	1,276
高雄州	104,522	2.48	104,522	1,276
花蓮港廳	104,522	2.48	104,522	1,276

二 内地府縣との人口比較

(大正十四年) (大正十四年末現在) (大正十四年) (大正十四年末現在)

府縣	人口	面積(平方里)	平均人口(一方里に付人口)
宮城縣	1,045,522	1,276	819
秋田縣	893,380	1,276	699
岩手縣	893,380	1,276	699
蕨北縣	4,750	1,276	37
蕨中縣	89,338	1,276	699
蕨南縣	1,045,522	1,276	819
蕨東縣	6,666	1,276	52
新竹縣	104,522	1,276	819
高雄縣	104,522	1,276	819
花蓮港廳	104,522	1,276	819
内地府縣は帝國統計年鑑に依る。			

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を含まず。但し一方里に付人口の全面積には、蕃地居住の蕃人をも加へて算出せり。

三三 主要都市

臺灣には五市、三十四街あり。就中人口二十萬以上の市及街は二十二にして、その第一位を占むるは臺北市の二十萬、之に次ぐは臺南市の八萬六千、基隆市の六萬五千、嘉義街の四萬五千、高雄市の四萬四千、臺中市の四萬二千、新竹街の三萬八千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに八千八百、同じく花蓮港街は八千を有するのみなり。(大正十四年末現在)

次に州及廳並に郡役所の所在地たる五市、三街を内地其の他の都市に比較するに、大正十四年十月一日現在に依れば、我が臺北市は大坂、東京、名古屋、京都、神戸、横濱、京城、廣島の八市に並ひて實に第九位を占め、長崎市の上に位し、臺南市は平壤、靜岡兩市の中間に、基隆市は松本、福井兩市の中間に、高雄市は秋田、郡山兩市の中間に、臺中市は福島、四日市兩市の中間に、新竹街は沼津、戸畑兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府廳原よりも少し。

一 主要都市の人口 (大正十四年末現在)

總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	200,000	198,000	2,000	1
臺南市(臺南州)	86,000	84,000	2,000	2
基隆市(臺北州)	65,000	63,000	2,000	3
臺中市(臺北州)	42,000	40,000	2,000	4
嘉義街(臺南州)	45,000	43,000	2,000	5
高雄街(臺南州)	44,000	42,000	2,000	6
新竹街(臺南州)	38,000	36,000	2,000	7
臺東街(臺東州)	8,800	8,800	0	8
花蓮港街(花蓮州)	8,000	8,000	0	9

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十八萬二千町步(七十九萬九千申)にして内、田三十七萬六千町步(三十八萬五千申)畑四十萬五千町步(四十一萬四千申)なり。今之を内地其の他と比較するに、耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは、關東州の五割二分三厘にして、臺灣は之に次ぎ、朝鮮の一割九分五厘はその第三位を占む。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

内地府縣	耕地面積		百分比例	
	田	畑	田	畑
樺太	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
關東州	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
朝鮮	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
臺灣	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
關東州	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
北關州	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
東海州	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
北海道	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
内地府縣	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇
合計	一、九八〇	一、九八〇	一〇〇	一〇〇

本表は大正十四年末の事實なり。
朝鮮、樺太、關東州(州内、州外)は同應統計書に依る。
北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の数は、八千五百七十八にして内、水利組合百三、公共埤圳三、認定外埤圳八千四百七十二なり。又其の灌溉面積は三十六萬一千甲にして内、其の五割二分は水利組合の灌溉に屬す。

總數	埤圳數	灌溉排水面積	灌溉面積百分比
水利組合	13	15,200	100
公共埤圳	3	1,500	10
認定外埤圳	8,462	19,300	50
總計	8,478	36,000	50

本表は大正十五年四月一日現在の事實なり。
本表の外事業計畫中の組合一あり。

二六 農 産

臺灣の農産物は、大正十四年中の總生産額二億六千九百萬圓にして内、普通作物一億八千七百五十四萬圓、特用作物六千九百萬圓、園藝作物二千九百萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億六千九百萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は四千七百五十四萬圓を以て之に次ぎ、甘蔗の二千二百萬圓、蔬菜類の九百萬圓、苧蕉の七百八十萬圓、茶の七百二十萬圓、落花生の二百九十萬圓、豆類の百八十萬圓、柑橘の百五十萬圓等順次に並ぶ。

作物	生産額	生産額百分比例	作付面積	收穫高
總計	2,690,000,000	100.0		
普通作物	1,875,400,000	69.7		
米(玄米)	1,690,000,000	62.8		
甘蔗	4,754,000,000	1.8		
豆類	290,000,000	0.1		
小麥	1,875,000,000	0.7		
其他	100,000,000	0.4		
特用作物	694,600,000	25.8		
落花生	7,200,000,000	0.3		
茶	7,800,000,000	0.3		
烟草	7,800,000,000	0.3		
苧蕉	7,800,000,000	0.3		
黄麻	7,800,000,000	0.3		
苧麻	7,800,000,000	0.3		
胡麻	7,800,000,000	0.3		
藍	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		
園藝作物	2,900,000,000	1.1		
苧蕉	7,800,000,000	0.3		
柑橘	7,800,000,000	0.3		
龍眼	7,800,000,000	0.3		
檳榔	7,800,000,000	0.3		
鳳梨	7,800,000,000	0.3		
椰子	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		
蔬菜	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		

作物	生産額	生産額百分比例	作付面積	收穫高
總計	2,690,000,000	100.0		
普通作物	1,875,400,000	69.7		
米(玄米)	1,690,000,000	62.8		
甘蔗	4,754,000,000	1.8		
豆類	290,000,000	0.1		
小麥	1,875,000,000	0.7		
其他	100,000,000	0.4		
特用作物	694,600,000	25.8		
落花生	7,200,000,000	0.3		
茶	7,800,000,000	0.3		
烟草	7,800,000,000	0.3		
苧蕉	7,800,000,000	0.3		
黄麻	7,800,000,000	0.3		
苧麻	7,800,000,000	0.3		
胡麻	7,800,000,000	0.3		
藍	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		
園藝作物	2,900,000,000	1.1		
苧蕉	7,800,000,000	0.3		
柑橘	7,800,000,000	0.3		
龍眼	7,800,000,000	0.3		
檳榔	7,800,000,000	0.3		
鳳梨	7,800,000,000	0.3		
椰子	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		
蔬菜	7,800,000,000	0.3		
其他	7,800,000,000	0.3		

二十七畜産

臺灣の畜産物生産總價額は、大正十四年に三千八百萬圓を算し内、家畜生産三千二百八十萬圓、家禽生産四百九十七萬圓、牛乳四十萬圓なり。
 家畜生産中、豚は二千九百八十萬圓を以て第一位を占め、水牛の百九十萬圓之に距き、家禽生産中第一位を占むるは鶏の三百八十萬圓なり。

種類	生産價額	生産價額 百分比例
總計	3,800,000	100.0
家畜	3,280,000	86.3
家禽	497,000	13.0
水牛	1,900,000	50.0
黄牛	1,000,000	26.3
豚	2,980,000	78.2
山羊	1,200,000	31.6
其他	100,000	2.6
牛乳	400,000	10.5
鶏	380,000	9.9

牛七鷹
而鳥
乳鳥

三三六〇
一四〇六
四〇三二

一〇九
一三
二二

二八 林 産

臺灣の林産物生産總額は、大正十四年に一千二百八十萬圓を算し内、官行生産額三
百四十萬圓、一般生産額九百三十萬圓なり。
官行生産額中第一位を占むるは丸太の二百四十萬圓にして、一般生産額中にては薪
の三百萬圓第一位を占む。

總 官行生産額

價 額

價額百分比例

丸	二七九三二	100.0
製	二〇四〇〇	七三.1
太	二〇九四〇	七五.3
材	九一三〇	三二.9
材	五二二五	一八.7
副生産品及副産物	六四三〇	二三.0
一般生産額	九四七七	三三.9
木	一〇三〇〇	三六.9
竹	三六八二	一三.2
籐	一三三〇	四.8
木	一三三〇	四.8
薪	二九四〇〇	一〇.五
炭	一五〇〇〇	五.4
筒	一〇〇〇	〇.四
官行生産額	三三六〇	十二.9
總	二七九三二	一〇〇.〇

其 菱 薯 蓮
他 黃 柳 草

官行生産額は營林所に於ける販拂價額にして、大正十四年度の事實を掲
せり。
一、〇〇〇
一、〇〇〇
一、〇〇〇

二九 鑛 産

臺灣の鑛産總價額は、大正十四年に一千四百六十萬圓を算し、内、石炭は總産價額の八割
八分、即ち一千三百萬圓を以て第一位を占め、金銅鑛は五十八萬圓を以て之に次ぎ、金の
三十七萬圓、石油の二十七萬圓等順次に垂く。

品名	産 額	價 額	價額百分比
石 炭	一、〇〇〇、〇〇〇噸	一、〇〇〇、〇〇〇圓	八〇・〇
石 油	二、七〇〇噸	二、七〇〇、〇〇〇圓	一九・〇
金 銅	五、八〇〇斤	五、八〇〇、〇〇〇圓	四・一
石 膏	三、〇〇〇噸	三、〇〇〇、〇〇〇圓	二・一
硫 磺	一、〇〇〇噸	一、〇〇〇、〇〇〇圓	〇・七
銀	一、〇〇〇斤	一、〇〇〇、〇〇〇圓	〇・七
砂 金	一、〇〇〇斤	一、〇〇〇、〇〇〇圓	〇・七
天然揮發油	一、〇〇〇噸	一、〇〇〇、〇〇〇圓	〇・七
總 額		一、二五〇、〇〇〇圓	一〇〇・〇

三〇 水産

臺灣の水産總價額は、大正十四年には一千七百七十萬圓以上に達し内、水産漁獲物一千萬圓、養殖漁獲物三百十六萬圓、水産製造物三百五十八萬圓、製鹽九十二萬圓なり。
 更に之を品目別に視れば、鰹節の二百五十萬圓第一位を占め、虱目魚の二百萬圓、鰹の百九十萬圓、鮪の百十七萬圓、鯛の百十五萬圓等順次に並ぶ。

水産漁獲物	價額	價額百分比
鯛	1,950,000	100.0
鮪	1,070,000	54.9
鰹	1,180,000	59.9
虱目魚	2,000,000	102.1
鰹節	8,680,000	443.6
鮪	5,630,000	288.2
鯛	3,520,000	180.5
鰹	2,210,000	113.3
鮪	1,520,000	77.9
鰹節	1,970,000	100.5
鮪	1,370,000	69.7
鯛	1,320,000	67.7
鮪	1,270,000	64.6
鯛	1,170,000	59.7
鮪	1,120,000	57.4
鯛	1,070,000	54.9
鮪	1,020,000	52.3
鯛	970,000	50.0
鮪	920,000	47.2
鯛	870,000	44.6
鮪	820,000	42.1
鯛	770,000	39.5
鮪	720,000	37.0
鯛	670,000	34.4
鮪	620,000	31.8
鯛	570,000	29.2
鮪	520,000	26.7
鯛	470,000	24.1
鮪	420,000	21.5
鯛	370,000	19.0
鮪	320,000	16.4
鯛	270,000	13.8
鮪	220,000	11.3
鯛	170,000	8.7
鮪	120,000	6.2
鯛	70,000	3.6
鮪	20,000	1.0
鯛	10,000	0.5
鮪	5,000	0.3
鯛	1,000	0.1
鮪	500	0.0
鯛	100	0.0
鮪	50	0.0
鯛	10	0.0
鮪	5	0.0
鯛	1	0.0
鮪	0.5	0.0
鯛	0.1	0.0
鮪	0.05	0.0
鯛	0.01	0.0
鮪	0.005	0.0
鯛	0.001	0.0
鮪	0.0005	0.0
鯛	0.0001	0.0
鮪	0.00005	0.0
鯛	0.00001	0.0
鮪	0.000005	0.0
鯛	0.000001	0.0
鮪	0.0000005	0.0
鯛	0.0000001	0.0
鮪	0.00000005	0.0
鯛	0.00000001	0.0

三一 工業

臺灣の工業總生産價額は、大正十四年に二億四千二百萬圓を算し内、砂糖の一億六千二百萬圓は糖を抜いてその第一位を占め、再製茶の一千百萬圓、酒精の六百萬圓、調合肥料の四百萬圓等順次に並ぶ。

品名	生産價額	百分比例
總額	2,420,000,000	100.0
砂糖	1,600,000,000	66.1
酒精(稅抜)	600,000,000	24.8
再製茶	1,000,000,000	41.3
原動機及其附屬機械類其他	2,279,000,000	94.2
木製品	1,111,000,000	45.9
セメント	3,219,000,000	133.0
染料	1,222,000,000	50.5
麵粉	3,212,000,000	132.7
煤(耐火)	1,519,000,000	62.8
調合肥料	400,000,000	16.5

品名	生産價額	百分比例
金銀細工	1,600,000,000	66.1
味増及醬油	1,111,000,000	45.9
植物性油	1,000,000,000	41.3
及同油類	2,279,000,000	94.2
敷瓦及屋根瓦	1,111,000,000	45.9
金銀	3,219,000,000	133.0
製紙	1,222,000,000	50.5
綿布、麻布類	3,212,000,000	132.7
糖(稅抜)	1,519,000,000	62.8
靴	1,000,000,000	41.3
帽	1,111,000,000	45.9
襪	1,222,000,000	50.5
靴狀工	1,333,000,000	55.1
竹	1,444,000,000	59.7
板	1,555,000,000	64.3
鳳梨	1,666,000,000	68.9
其他	1,777,000,000	73.5

三二糖業

臺灣の糖業は大正十五年期に於て、公稱資本額二億六千萬圓、作業工場數百九十八、作業能力四萬二千噸を有し、其の製糖高八億三千三百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十七、作業能力三萬九千噸を有し、その製糖高八億一千二百萬斤を算す。

總	公稱資本金	作業工場數	作業能力	製糖高	製糖高百分比例
新式製糖會社	二六、〇〇〇、〇〇〇	一三	三九、〇〇〇	八、一〇〇、〇〇〇	二〇・〇
臺灣製糖	二五、〇〇〇、〇〇〇	一〇	九、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	二三・九
東洋製糖	一五、〇〇〇、〇〇〇	六	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
明治製糖	一五、〇〇〇、〇〇〇	五	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
帝國製糖	一八、〇〇〇、〇〇〇	三	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
新高製糖	一六、〇〇〇、〇〇〇	三	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
鹽水港製糖	一六、〇〇〇、〇〇〇	七	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
大日本製糖	一六、〇〇〇、〇〇〇	三	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
臺南製糖	一六、〇〇〇、〇〇〇	三	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六
新竹製糖	一六、〇〇〇、〇〇〇	一	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一二・六

林本製糖	沙糖製糖	臺東製糖	新興製糖	改良糖廠	舊式糖廠
三、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
一	一	一	一	一	一
一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇
一三	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇

大正十五年期とは大正十四年十一月より同十五年十月に至る期間を云ふ。

三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも、大正五年には世界大戦の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓に上り、大正八年には更に三億圓を突破せり。然るに大正十年及十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退したりしも、大正十二年には復た三億圓に上り、大正十四年には四億五千萬圓に達し、人口一人當百十圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に過半数を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

年	總額	指數		貿易總額		平均	
		外國貿易	内地貿易	外國貿易	内地貿易	外國貿易	内地貿易
大正元年	31,000,000	100	100	100	100	100	100
二年	32,000,000	103	102	103	102	103	102
三年	33,000,000	106	105	106	105	106	105
四年	34,000,000	109	108	109	108	109	108
五年	35,000,000	113	112	113	112	113	112
六年	36,000,000	116	115	116	115	116	115
七年	37,000,000	119	118	119	118	119	118
八年	38,000,000	123	122	123	122	123	122
九年	39,000,000	126	125	126	125	126	125
十年	40,000,000	130	129	130	129	130	129
十一年	41,000,000	133	132	133	132	133	132
十二年	42,000,000	137	136	137	136	137	136
十三年	43,000,000	140	139	140	139	140	139
十四年	44,000,000	143	142	143	142	143	142

年	總額	指數		貿易總額		平均	
		外國貿易	内地貿易	外國貿易	内地貿易	外國貿易	内地貿易
大正元年	31,000,000	100	100	100	100	100	100
二年	32,000,000	103	102	103	102	103	102
三年	33,000,000	106	105	106	105	106	105
四年	34,000,000	109	108	109	108	109	108
五年	35,000,000	113	112	113	112	113	112
六年	36,000,000	116	115	116	115	116	115
七年	37,000,000	119	118	119	118	119	118
八年	38,000,000	123	122	123	122	123	122
九年	39,000,000	126	125	126	125	126	125
十年	40,000,000	130	129	130	129	130	129
十一年	41,000,000	133	132	133	132	133	132
十二年	42,000,000	137	136	137	136	137	136
十三年	43,000,000	140	139	140	139	140	139
十四年	44,000,000	143	142	143	142	143	142

(1) 同同同同同同同
 は十十十十
 移四三二一八七
 入年年年年年
 過適なり。

二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二六九七	二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七

(1) 同同同同同同同
 正十十十十
 は四三二一八七
 輸出過適なり。

内地貿易

同同同同同大
 正
 六五四三二元
 年年年年年

二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七

二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七
二七九七	二八〇〇	二八〇一	二八〇二	二八〇三	二八〇四	二八〇五	二八〇六	二八〇七

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘多きは五割五分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは五割七分を占む。

今大正十四年の外國貿易に就て視るに、貿易總額一億圓中、輸出額は四千七百萬圓にして、就中支那の二千六百萬圓最も多く、總額の五割五分に當り、輸出額は四千七百萬圓にして、香港の五百萬圓、關領印度の四百萬圓等順次に並く、輸入額は五千六百萬圓中第一位を占むるは支那の三千萬圓にして、總額の五割四分に當り、英吉利の五百三十萬圓、英領印度の三百八十萬圓、關領印度の三百四十萬圓、北米合衆國及波斯の各二百二十萬圓等順次に並く。

一 輸出

總額	支那	關領印度	香港	支那	關領印度	香港
大正十四年	2,600,000	400,000	500,000	同十三年	2,500,000	380,000
同十二年	2,400,000	380,000	480,000	同十一年	2,300,000	460,000
同十年	2,200,000	360,000	460,000	同九年	2,100,000	440,000
同元年	2,000,000	340,000	420,000			

總額	支那	關領印度	香港	支那	關領印度	香港
大正十四年	2,600,000	400,000	500,000	同十三年	2,500,000	380,000
同十二年	2,400,000	380,000	480,000	同十一年	2,300,000	460,000
同十年	2,200,000	360,000	460,000	同九年	2,100,000	440,000
同元年	2,000,000	340,000	420,000			

二 輸入

總額	支那	關領印度	香港	支那	關領印度	香港
大正十四年	3,000,000	450,000	550,000	同十三年	2,900,000	430,000
同十二年	2,800,000	430,000	530,000	同十一年	2,700,000	510,000
同十年	2,600,000	410,000	510,000	同九年	2,500,000	490,000
同元年	2,400,000	390,000	490,000			

海峽植民地及英領ボルネオ	三六	二六	一四	三三	二二	一四	一五
英領大刺利	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
波 斯	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
獨 逸	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
英 吉 利	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
北米合衆國	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
英領アメリカ	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三
其 他	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

三五 支那、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要な地位を占む。即ち大正十四年に就て觀るに、輸出額は三千七百萬圓にして、輸出貿易總額の約七割八分を占め、輸入貿易は三千九百萬圓にして、輸入貿易總額の七割に當れり。

一 輸 出

總 額	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
支 那	三,七〇〇,〇〇〇	三,一〇〇,〇〇〇	二,九七〇,〇〇〇	二,九〇〇,〇〇〇	二,七〇〇,〇〇〇	二,六〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇
香 港	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
南 洋	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、關領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及大刺利を謂ふ。以下同し。

二 輸 入

總 額	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
支 那	三,九〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇	二,九〇〇,〇〇〇	二,八〇〇,〇〇〇	二,七〇〇,〇〇〇	二,六〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇

南洋 三比例 支那 香港 南洋

Table with columns for years (大正十年 to 十二年) and regions (支那, 香港, 南洋). Includes sub-headers for '支那、香港、南洋貿易總額' and '外國貿易總額'.

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今大正十四年に就て之を觀るに、茶は一千四百四十萬圓を以て第一位を占め、石炭の七百四十萬圓、砂糖の五百九十萬圓、樟腦の三百六十萬圓等順次に並ぶ。

Table with columns for years (同, 十四年, 十三年) and regions (支那, 香港, 南洋).

茶 糖 大正十三年/同十三年 同十二年 同十一年 同十年 同九年 同元年

一 輸出

Table with columns for years (大正十三年, 同十三年, 同十二年, 同十一年, 同十年, 同九年, 同元年).

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、芭蕉實、樟腦及樟腦油、木材及板材、酒精、切乾藥、石灰、蠟燭等なり。今大正十四年に就て之を觀るに、砂糖は一億五百萬圓を以て第一位を占め、米の七千二百萬圓、芭蕉實の九百萬圓、酒精の三百八十萬圓、樟腦及樟腦油の三百三十萬圓、木材及板材の二百八十萬圓、切乾藥の百三十萬圓、鳳梨糖、附及石灰の各百九十萬圓等順次之に並く。

次に移入品の主要なるものは、絹織及絹織布、鹹魚及乾魚、肥料、鐵、酒類、紙、小麥粉等にして、大正十四年には米の一千六百萬圓を以て第一位を占め、絹織及絹織布の一千五百萬圓、肥料の六百三十萬圓、鐵の六百萬圓、鹹魚及乾魚の五百九十萬圓、小麥粉の三百九十萬圓、木材及板材並錫の各三百五十萬圓、紙の三百四十萬圓等順次之に並く。

品名	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
砂糖	1,500,000,000	1,292,000,000	1,282,000,000	1,270,000,000	1,260,000,000	1,250,000,000	1,240,000,000
米	72,000,000	72,000,000	72,000,000	72,000,000	72,000,000	72,000,000	72,000,000
芭蕉實	90,000,000	90,000,000	90,000,000	90,000,000	90,000,000	90,000,000	90,000,000
酒精	38,000,000	38,000,000	38,000,000	38,000,000	38,000,000	38,000,000	38,000,000
樟腦及樟腦油	33,000,000	33,000,000	33,000,000	33,000,000	33,000,000	33,000,000	33,000,000
木材及板材	28,000,000	28,000,000	28,000,000	28,000,000	28,000,000	28,000,000	28,000,000
切乾藥	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000
鳳梨糖	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000
石灰	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000
蠟燭	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000	19,000,000

移出

品名	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同元年
絹織及絹織布	1,600,000,000	1,600,000,000	1,600,000,000	1,600,000,000	1,600,000,000	1,600,000,000	1,600,000,000
鹹魚及乾魚	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000
鐵	600,000,000	600,000,000	600,000,000	600,000,000	600,000,000	600,000,000	600,000,000
木材及板材	590,000,000	590,000,000	590,000,000	590,000,000	590,000,000	590,000,000	590,000,000
酒精	380,000,000	380,000,000	380,000,000	380,000,000	380,000,000	380,000,000	380,000,000
芭蕉實	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000
肥料	630,000,000	630,000,000	630,000,000	630,000,000	630,000,000	630,000,000	630,000,000
過磷酸肥料	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
硫酸アンモニア	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000

移入

關合肥料	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
甘藷及	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
黃麻	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
紙	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
米	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
鐵製	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
小麥	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
各種雜糧	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
石	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
綿	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
毛織物	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600
メリヤス肌衣(各種)	1,200	2,200	1,400	2,400	1,500	2,500	1,600	2,600

三八 港別貿易

大正十四年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額四億五千萬圓を港別に觀れば、基隆の二億五千萬圓第一位を占め、總額の五割七分に當り、高雄の一億七千萬圓之に耶て三割八分を占め、安平の一千三百萬圓、淡水の三百三十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の五分を占むるに過ぎず。

今之を内地其他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪、大連に亞て第五位を占めて大連と釜山の中間に、高雄は第七位を占めて釜山と仁川との中間に在り。更に安平は鹿兒島と教賀との中間に、淡水は徳山と下關との中間に位あす。

神戶	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500
横濱	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500
大阪	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
大連	800	800	800	800	800	800	800	800
基隆	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000
高雄	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700	1,700
安平	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300	1,300
仁川	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
釜山	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
鹿兒島	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
教賀	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
淡水	300	300	300	300	300	300	300	300
徳山	300	300	300	300	300	300	300	300
下關	300	300	300	300	300	300	300	300
總額	45,000	45,000	45,000	45,000	45,000	45,000	45,000	45,000

鹿島	二五、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
安賀	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
教賀	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
徳賀	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
淡路	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇
下関	三、〇〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇

家海及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。
朝鮮、關東州は同應統計書に依る。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

三九 財政

本廳總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしか、爾來年と共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓を以て新記録を作りたりしか、大正十年度よりは少しく減退を示したり。然るに大正十四年度には再び一億一千九百萬圓に達せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の増減あるも、少きは三割九分、多きは七割五分を占む。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に増額したりしも、大正十二年度以降は八千萬圓に減退せり。

年度	總額	租稅	官業及官有財産收入	其他	租稅指數	官業及官有財産收入指數	其他指數	歳出指數
明治三十八年度	25,000,000	10,000,000	15,000,000	0	100	100	100	100
大正元年度	30,000,000	12,000,000	18,000,000	0	120	120	100	100
同 六年度	45,000,000	18,000,000	27,000,000	0	180	180	100	100
同 七年度	60,000,000	24,000,000	36,000,000	0	240	240	100	100
同 八年度	100,000,000	40,000,000	60,000,000	0	400	400	100	100
同 九年度	119,000,000	47,600,000	71,400,000	0	476	476	100	100
同 十年度	119,000,000	47,600,000	71,400,000	0	476	476	100	100
同 十一年度	960,000,000	384,000,000	576,000,000	0	3840	3840	100	100

同	九年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十一年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十二年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十三年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十四年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇
同	十五年度	二九一四	三三〇三	三六八四	四〇〇〇	四三〇〇	四六〇〇	四九〇〇	五二〇〇

本表中大正十二年度迄は決算、大正十三年度及同十四年度は現計、大正十五年度は豫算なり。

四〇 專賣

臺灣の專賣は現在、阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施とす。今最近十四年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものか、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に減退したる爲め、總額も二千五百萬圓に低下したりしか、大正十一年度には稍々状況を回復したると、酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、大正十二年度には四千萬圓を突破し、大正十四年度には四千三百萬圓に増加せり。

同	大正元年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	二年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	三年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	四年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	五年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	六年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	七年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	八年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇
同	九年度	一七〇六九二	六三三六天	一〇三〇〇	一〇三〇〇

賣渡總額

阿片烟膏

食鹽

同十四年度	同十三年度	同十二年度	同十一年度	同十年度	同九年度	同八年度	同七年度	同六年度	同五年度	同四年度	同三年度	同二年度	同元年度	同十四年度
三、〇六八、七〇〇	二、〇三六、一〇〇	一、一〇二、一〇〇	三、一〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

臺灣に於ける銀行は、大正十四年十二月末現在に依れば行數七（内、日本勸業銀行及三十四銀行は支店）にして、島内に於ける支店及出張所數合計四十六、資本金九千五百萬圓、（拂込金八千萬圓）、準備金二百萬圓、純益金四百萬圓、負債二千六百萬圓、預金一億二千萬圓、貸出金一億九千萬圓なり。

總數	公稱	資本	準備金	純益金	貸付金	負債	預金
五	五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	二、六〇〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇

四一 銀行

同十四年度	同十三年度	同十二年度	同十一年度	同十年度	同九年度	同八年度	同七年度	同六年度	同五年度	同四年度	同三年度	同二年度	同元年度
三、〇六八、七〇〇	二、〇三六、一〇〇	一、一〇二、一〇〇	三、一〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

臺灣銀行	日本勸業銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行	華南銀行
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五、〇〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇

三十四銀行
 臺灣支店 三 六〇〇
 日本勸業銀行支店及三十四銀行支店の資本金は本島各支店に於ける元金を掲ぐ、
 但し勸業銀行支店元金は毎月末本店勘定の平均額なり。

四二物價

臺灣の物價は世界大戦の影響を受けること比較的少かりしも、戦局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしか、翌大正十年以降は稍々低落の趨勢に在るも、最近に至り豚肉、木炭、薪は稍々高率を示せり。即ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十四箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

同	同	同	同	同	同	同	同	同	大	
十	九	八	七	六	五	四	三	二	正	元
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
三	三	三	二	二	二	二	二	二	一	米
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	糖(白)
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	麵(太)
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	油(菜)
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	肉(牛)
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	豚肉
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	木炭
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	薪

同同同
十三年
十四年

三三三
三三三
三三三
三三三
三三三
三三三
三三三
三三三
三三三
三三三

四三教 育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内臺人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校の八百六十二校、児童二十四萬五千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十一校、生徒七千五百人、師範學校は三校、生徒千七百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、工業學校、商業學校の二十校、生徒二千二百人、專門教育機關たる醫學專門學校、高等農林學校、高等商業學校、商業專門學校の四校、生徒八百人、私立各種學校二十校、生徒二千五百人、書房百十二、生徒四千八百人あり。
次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、人口千に對する小學校児童數は、北海道の百六十五人最も多く、關東州の九十一人九分最も少く、我臺灣は百三十七人を以て朝鮮、關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官立私立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學校並公立普通學校児童の人口千に對する割合は、樺太の百十八人八分最も多く、我臺灣は五十七人三分を以て之に距き、朝鮮は僅かに二十八人八分を以て最下位に在り。

一 教育機關 (大正十四年度)

學校數 教員數 生徒又は児童數 教員一人に付生徒數
醫學專門學校 一 三 三

高等農林學校	1	1	1
高等商業學校	1	1	1
商業專門學校	1	1	1
高等專門學校	1	1	1
師範學校	3	4	2
中學校	9	12	2
高等女學校	2	1	2
農林學校	1	1	1
工業學校	1	1	1
商業學校	1	1	1
小學校	1	1	1
公立小學校	3	3	3
私立各種學校	3	3	3
實業補習學校	3	3	3
私立各種學校	3	3	3
附房	3	3	3

學校(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員生徒(児童)は三月一日現在なり。教員には兼務者を含む。

二 内地其の他との初等教育比較

小學校	校數	教員數	児童數	一校平均児童數	教員一人に付児童數	人口千に付児童數
瀋陽	11	62	3,643	163.0	2.7	307
朝鮮	11	102	5,663	195.0	3.2	366
關東	20	67	2,563	128.2	2.1	246
北海道	11	37	2,263	205.7	2.7	307
内地府縣	3,687	8,533	3,333,333	389.7	4.6	550
公學校	7,901	5,057	3,030,303	383.9	4.5	545
朝鮮	1,333	7,833	5,566,667	417.7	5.3	668
關東	3,601	2,701	1,701,701	472.4	5.7	715

公學校の朝鮮は官公私立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内、州外、領事館は官立公學校及公立普通學校の事實なり。
人口千に付児童算出の基礎は、小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の児童は大正十五年三月一日現在なり。
 朝鮮は大正十四年度末(児童は大正十五年三月一日)現在にして同府統計書に依る。
 樺太は大正十四年度末現在にして同府統計書に依る。
 關東州(州内、州外、領事館)は大正十四年度末現在にして同府統計書に依る。
 北海道、内地府縣は大正十四年度末(児童は大正十五年三月一日)現在にして帝國統計
 年鑑に依る。

四四 衛生機關

臺灣には大正十四年末現在、官立十二、公立十九、私立七十一、計百二の醫院と、九百
 七十二名の醫師と、五百二十二名の衛生士と、一千三名の産婆を有す。醫師、衛生士一人に對
 する人口は金島平均二千七百九十九人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千二百九十
 六人、最も多きは臺東廳の三千九百二十六人なり。

總數	醫院		醫師及衛生士		産婆	一人に對する人口
	官立	公立	醫師	衛生士		
總數	12	19	71	900	1,000	3,172
臺東廳	1	1	1	1	1	3,926
花蓮廳	1	1	1	1	1	3,251
高雄州	1	1	1	1	1	3,251
台南州	1	1	1	1	1	3,251
嘉義州	1	1	1	1	1	3,251
新竹州	1	1	1	1	1	2,296
總計	12	19	71	900	1,000	3,172

衛生士は明治三十四年府令第四十七號臺灣衛生免許規則に依り免許を得て其の管
 轄内に於て醫師を兼と爲す者とす。
 本表の外藥劑師八十五名、齒科醫師九十四名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は大正十四年度末に二十九箇所あり。其の所管は臺灣總督府所管一(恒春種畜支所、陸軍省所管三(臺東、玉里、パロン)、州所管一(南方澳)、廳所管二(花蓮港、ピナン)にして、其の他は總て所在市街庄の經營に係る。

同年度末現在給水戸數は、臺東、パロン、ピナン、恒春を除き、專用給水戸數二萬六千三十九戸、共用給水戸數二萬一千六百三戸にして、其の消費水量は消費水量不明の七水道を除き、二千五百八十七萬餘立方米なり。

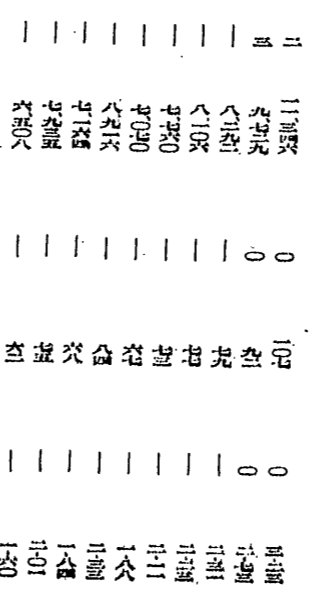
名稱	給水開始年月	年度末現在 戸數	年度中消費水量(立方米)
淡水	明治三十二年三月	1,200	1,200,000
基隆	同 三十五年三月	1,500	1,500,000
彰化	同 四一年四月	1,800	1,800,000
臺北	同 四二年七月	2,000	2,000,000
金山	同 四三年六月	1,500	1,500,000
士林	同 四四年五月	1,800	1,800,000
北投	同 四四年六月	1,500	1,500,000
大甲	同 四五年六月	1,200	1,200,000
斗六	大正元年八月	1,000	1,000,000
合計		17,000	17,000,000

大正十一年
元二三年四五年六七八九十年

11,268	10,333	9,505	8,746	7,957	7,185	6,458	5,743	5,031	4,321	3,612	2,903	2,194	1,485
5,634	5,166	4,734	4,302	3,870	3,438	3,006	2,574	2,142	1,710	1,278	846	414	0
5,634	5,166	4,734	4,302	3,870	3,438	3,006	2,574	2,142	1,710	1,278	846	414	0
11,268	10,333	9,505	8,746	7,957	7,185	6,458	5,743	5,031	4,321	3,612	2,903	2,194	1,485
5,634	5,166	4,734	4,302	3,870	3,438	3,006	2,574	2,142	1,710	1,278	846	414	0
5,634	5,166	4,734	4,302	3,870	3,438	3,006	2,574	2,142	1,710	1,278	846	414	0
11,268	10,333	9,505	8,746	7,957	7,185	6,458	5,743	5,031	4,321	3,612	2,903	2,194	1,485
5,634	5,166	4,734	4,302	3,870	3,438	3,006	2,574	2,142	1,710	1,278	846	414	0

四七 阿片吸食特許者
 臺灣總督府は阿片問題に就ては、嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片吸食者と認むる者に限り其の吸食を特許し、漸次之を絶滅を期し、逐年漸期の目的の到達に近づきつゝあり。即ち之を最近十四年間に就て觀るに、阿片吸食特許者(本島人の數は八萬七千三百七十一人より三萬三千七百五十五人に減少したり。

同同同同同同同同
 十十十十十
 四三二一 九八七六五
 年年年年年年年年



同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十二年	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	二十年	二十一年
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
...

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみの事實なり。

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、大正十四年度末には官設鐵道(阿里山鐵道を含む)の營業哩數五百六十哩に達し、外に私設鐵道千三百十二哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所に於て、營業線は三百十四哩なり。今之を内地其他と比較するに、百方に付鐵道營業線の哩數は、關東州の二百八十八哩四分最も多く、我臺灣の七十哩五分に過ぎ、樺太の五哩八分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の七哩一分最も多く、朝鮮は約一哩にして最も少く、臺灣は二哩二分を以て内地の上に在り。

營業線延長(哩)

總數	官設		私設	
	總數	百方に付	總數	百方に付
臺灣	705.5	7.05	331.2	3.31
朝鮮	1,213.3	12.13	1,082.1	10.82
關東	288.4	2.88	288.4	2.88
樺太	5.8	0.058	5.8	0.058
内地	10,214.2	102.14	7,517.1	75.17

朝鮮、樺太、關東州は大正十四年度末現在にして同應統計附に依る。
内地道府縣は大正十三年度末現在の營業線に於て帝國統計年鑑に依る。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十四年度に於て通常郵便は引受五千七百萬、配達六千六百萬、電信は發信百三十萬、著信百四十萬、爲替は振出二千五百萬圓、拂渡千六百萬圓、貯金は預入一千二百二十萬圓、拂戻一千百三十萬圓、貯金現在九百萬圓、振替貯金口座受入六千八百九十萬圓、拂出六千八百八十萬圓、現在四十七萬九千圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬一千三百二十八、年度中加入者數は通話度數は五千萬なり。

今之を内地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最少數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口十に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは内地府縣なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便 人口十に對する 受 達 引 受

電信	電報	電話	電燈	電線	電柱	電線	電柱
加入者	加入者	加入者	加入者	加入者	加入者	加入者	加入者
1,234	567	890	1,234	567	890	1,234	567
...

二 内地其の他との比較 (大正十四年度)

項目	内地	朝鮮	台湾	関東	北地	内地
加入者	1,234	567	890	1,234	567	890
...

北海道、内地府縣は大正十三年度の事實にして帝國統計年鑑に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十四年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課二、警察署六、郡警察課四十六、支廳七、派出所及駐在所千三百九十三にして、同職員の數は警察士五人、警部及警部補四百九十人、巡查六千八百八十六人なり。
 今之を内地其の他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の九人七分最も多く、臺灣は三人を以て之に並き、巡查一人に付人口は北海道の千二百四十三人第一位を占め、内地府縣の千百十五人之に並き、我臺灣は六百二人を以て僅かに關東州の上に在り。

内地府縣	警察署	分署	派出所及駐在所	警視	警部及警部補	巡查	一方里に對する	
							巡查一人に付人口	巡查一人に付人口
臺灣	5	2	1,393	5	490	6,886	9.7	243
關東州	16	1	1,393	2	490	6,886	9.7	243
朝鮮	16	1	1,393	2	490	6,886	9.7	243
東海	3	1	1,393	2	490	6,886	9.7	243
北道	3	1	1,393	2	490	6,886	9.7	243
内地府縣	3	1	1,393	2	490	6,886	9.7	243

本表は大正十四年末現在なり。
 本表巡查一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。

臺灣の警察署には郡役所警察隊及支廳を含む。
 關東州の警察支署及民政支署は警察分署として掲す。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、州外、領事館)は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

五一 最近十四年間の進歩

林畜農	畑田	耕				總	人
		總	外	本	内		
産	産	産	地	人	人	人	口
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇
三、九七〇圓	三、九七〇圓	三、九七〇圓	一、七九〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇	三、一八〇

鐵	水	工	糖	製	製	財	專	總
產	產	產	積	高	類	政	入	類
一、四七三、四〇〇圓	一、七〇五、四〇〇圓	二、〇二八、八〇〇圓	三、三三六、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	二、九一六、八〇〇圓	一、八七〇、八〇〇圓	一、七〇三、三〇〇圓
一、四七三、四〇〇圓	一、七〇五、四〇〇圓	二、〇二八、八〇〇圓	三、三三六、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	二、九一六、八〇〇圓	一、八七〇、八〇〇圓	一、七〇三、三〇〇圓
一、四七三、四〇〇圓	一、七〇五、四〇〇圓	二、〇二八、八〇〇圓	三、三三六、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	二、九一六、八〇〇圓	一、八七〇、八〇〇圓	一、七〇三、三〇〇圓
一、四七三、四〇〇圓	一、七〇五、四〇〇圓	二、〇二八、八〇〇圓	三、三三六、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	一、三三三、四〇〇圓	二、九一六、八〇〇圓	一、八七〇、八〇〇圓	一、七〇三、三〇〇圓

阿片	食鹽	樟腦	鴉片	酒	教	小	公	中	實	師	專	官	運	收
類	類	類	類	類	育	學	學	學	業	範	門	設	輸	入
六、〇七六、八〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	五、七〇三、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	八、九六〇、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓
六、〇七六、八〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	五、七〇三、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	八、九六〇、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓
六、〇七六、八〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	五、七〇三、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	八、九六〇、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓
六、〇七六、八〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	五、七〇三、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	八、九六〇、〇〇〇圓	四、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	七、七〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	一、一〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓	三、三〇三、〇〇〇圓

私設鐵道線路延長
郵便、電信及電話

六六哩

一三三哩

三

通寄郵便引受通數
電報發信通數
爲替振出金額
貯金預入金額
電話加入現在
電話加入者
電話通話度數

三〇五五三

九〇三三

一四九七〇圓

三二六二圓

三七六

一七〇〇〇〇〇

五四二六

一六四〇

三六四〇圓

二四四〇圓

一三六

五〇〇〇〇

六

二

六

三

〇

六

昭和二年六月廿八日印刷
昭和二年六月三十日發行

臺灣總督府

臺北市大正町二丁目三十七番地

印刷者 坂川 首

臺北市榮町四丁目三十二番地

印刷所 株式會社 臺灣日日新報社



臺灣現勢要覽

昭和三年版

